まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 48

京都　常照皇寺　九重枝垂桜

特 パートナーシップのまちづくり 集

―まちづくりグループの活動から―

- 夢は宇摩ハーブガーデン
- パートナーシップは同じ土俵に立つことから
- 島に元気な風を
- 間合いを計る
- つかず離れず

アングル
21世紀へ向けての
エコロジータウン・うちこ……愛媛県町村会会長　内子町長／河内　紘一……1

特『パートナーシップのまちづくり』**集**
―まちづくりグループの活動から―
夢は宇摩ハーブガーデン……宇摩地域／西川　友義……2
パートナーシップは同じ土俵に立つことから……長浜町／二宮　増男……4
島に元気な風を……中島町／山本　昭宏……6
間合いを計る……玉川町／小山田憲正……8
つかず離れず……保内町／岡崎　直司……10

論談―まちづくり―
地域の時代をつくる「エディターシップ」
……智頭町活性化プロジェクト集団／寺谷　篤……12

キラリ光る町
じょんのびの里・高柳町
……新潟県高柳町㈱じょんのび村協会／今野冨士子……14

ふれあい広場
リレーでちょっトーク（内海村・丹原町から）……16

地域を生きる
木林森夢クラブ活動……大洲市／平谷　和生……18

研究員レポート
優しさに包まれたまち“しろかわ”……酒井　康次……20
えひめ地域づくり研究会議 '95年度フォーラム・レポート……藤田　良……22

風おこしのちかい
今こそ、ふるさと孝行を……塩崎　満雄……24

Information
媛のくにフラッシュ〈愛媛県・今治市・西条市・久万町・伊予市・宇和町〉……26
㈶愛媛県まちづくり総合センター平成8年度事業計画

特集〝パートナーシップのまちづくり〟

今号のテーマ
まちづくりグループの活動から

今日「まちづくり」という言葉は定着してきた観があるが、ややもすれば住民の意見要望は一部反映されながらも、施設建設等のハード整備が先行し、地域住民のまちづくり活動拠点施設としての利活用の不十分さも一部見受けられる。

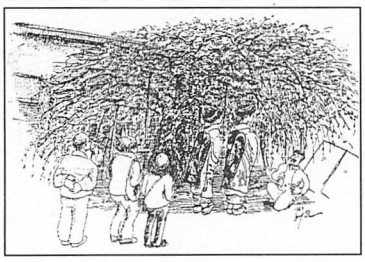
まちづくりは、ハードは行政、ソフトは住民と言った単なる役割分担的な考えのみではなく、住民の参画した施策の展開、あるいは住民の主体的な活動における行政との密接な提携などパートナーシップのまちづくりを推進していくことが重要である。

そこで、特集のメインテーマを「パートナーシップのまちづくり」とし、今号では、まちづくりグループの活動をとおして、それぞれの地域の現場からパートナーシップのまちづくりのあり方を考えてみることとします。

表紙の言葉

三度目にして、ようやくこの花見が出来ました。京都北部、山中の足利家ゆかりの常照皇寺境内の九重枝垂桜です。岐阜県の、薄墨桜とセットツアーが組まれる程、優雅で、品格の良い美しい姿の桜ですが、台風、雪の重みで、枝が折れて、歴史を重ねた姿が、淋しく変わっています。それでも舞妓さん登場で一段と華やかになりました。

柳原あや子



九重枝垂桜（京都 常照皇寺）

21世紀へ向けての エコロジータウン・うちこ

愛媛県町村会会長
内子町長
河内紘一

例年のこととはいえ、十二月を過ぎて年度末になると、やたらと視察研修の旅行者が増える。訪れる側は一度きりのことであるが、訪れられる側は週に一度のこともあれば、連日のことだってある。二か月も前からの予約であれば、否定する理由もなく受け入れる。ところがまちの人との約束事は、こうした多忙の中にしか入らない。時には誰のために公務に励んでいるのか分からない有様である。

これは、内子町役場の職員から聞いた話であるが、事実とすればありがたいことである。私は結構多忙で、職場で椅子を温める間もなく出歩いているので、事情は分かっているようでも、見えない部分が少なくない。

状況はどうあれ、一人でも多くの方々が内子町を訪れていただくことは、高次元のまちづくりを自負する私にとってこの上ない喜びと思っている。そして、専門図書、雑誌、新聞、テレビなど今日的なメディアの中に、町並み保存が登場し、村並み保存運動が報じられるたびに、内子町が登場したぞとばかりに喜んでいただく多くの内子ファンと、内子町にふるさとを持ち、都会で働いておられる内子人がいることまた　忘れてはならないことである。

「ふるさとは遠きにありて思うもの」とは室生犀星の詩の一節であるが、外に出た人たちのふるさと感を考えたとき、まちに住んで「ふるさと　とを共有している」といった実感は容易に浮かばない。過疎と高齢化の中の疲弊といったマイナスの要素ばかりが目に付き、地域住民の暮らしの負担になり勢い活性化の名のもとに近代化を求め、利便性を追求しなければならない現実が存在するとすれば、華やいだ都会の裏側の非人間的で、非自然的で、かつ功利的な暮らしとの葛藤から逃れることはできない。

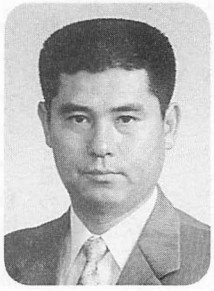
内子町がまちづくりの基本にエコロジータウン・うちこを掲げたのはこ　のような自らの本質に反してまちが外に目を向けて競争し、まちを飾ることで他の町と比較して町民が安堵し、納得しているとすれば、恐らく二十一世紀に禍根を残すことになるであろう。少しばかりの旱魃が続くと町民の生活用水に支障を来しても、開発が先行せざるを得なくなる。自らのまちに対して、開発の適量化へ向けたコントロールの難しさが今問われているようでもある。

世の中、何かをやろうとしたとき、常識と非常識の凌ぎあいの中に答えが求められ、モノが造られたり壊されたりもする。そして地域社会の流れもまた多数派の答えに従って方向が決まりもする。バスに乗り遅れるなという言葉が流行してから随分と時代が変わったが、やはり東京を中心に山村までも同じ価値基準のバスを走らせないとまちが動かないとすれば、地域のアイデンティティは生まれない。

今、豊かさの本来の姿が求められようとしている中で、内子町は少しでも様変わりしたバスを探して二十一世紀へのまちづくりの道を探したい。

『夢は宇摩 ハーブガーデン』

アトリエUMA
西川友義



◆はじめに

アトリエUMAは、平成五年四月に設立されたまちづくり集団です。

宇摩地域をキャンパスに見立て、そこに自由な発想で夢を描いていこうという意味で、こんな名称になりました。

◆宇摩地域とは

宇摩地域は、愛媛の東端に位置しますが、四国の中で見ると高速道路のクロス地点にあり、まさに四国のど真ん中です。そして、川之江市・伊予三島市・土居町・新宮村・別子山村の二市一町二村で構成され、人口は約十万人です。

まちの特色は、川之江市に紙まつりがあるように、製紙・紙加工・水引・金封・手漉き等、紙に関することならなんでも揃っていることです。

しかしながら、活気ある基幹産業がある反面、余暇を楽しく過ごす場、ゆとりのスペースがまちの中には少ないのが現状です。

最近は、豊かな自然がある新宮村や別子山村へのアクセス道路が整備されたことにより、休日には山間部へ多くの人が訪れるようになりました。今日、宇摩地域は、高速道路の整備により、「四国中央のまち」として大きな可能性を持つようになったと言えるでしょう。

◆アトリエUMA誕生

三年前、四国中央のまちとして、もっと魅力あるまちにしたいという青年たちの思いから、この宇摩地域に、行政エリアを越えたまちづくり集団アトリエUMAが誕生しました。

それぞれの地域の個性を生かしながら、一つの市町村だけではできないこと、あるいは、一緒にやった方がより効果的なことを実践してみようという青年たちの想いが集まったのです。

設立当初より、市町村行政の理解も得られ、財政面の協力を頂くことができました。活動テーマは、メンバーが興味を持って楽しく関われるようなものを発想しています。

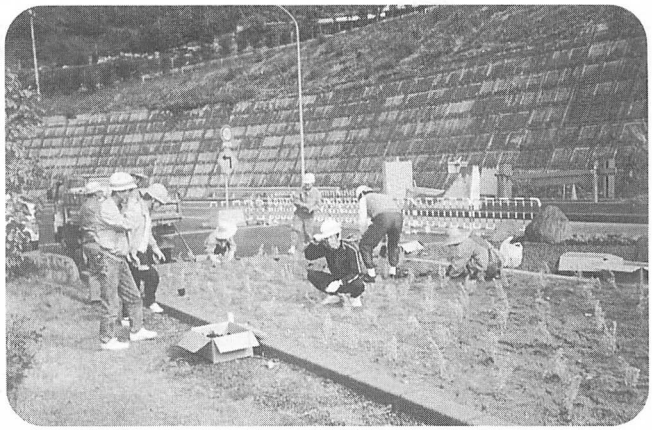
初年度は、二市一町二村のそれぞれのまちをもっとよく知ろうと、地域内交流を中心に活動を行いました。

そして、二年目の平成六年度より、「ハーブによるまちづくり」が一つのテーマとしてスタート致しました。

◆ハーブによるまちづくり

平成六年五月より、ハーブについての勉強を始め、まちづくりの題材として検討を重ねました。講師を招いての勉強会や実験植栽などをやってみながら、ハーブの面白さを二市一町二村へ提案し、「宇摩地域をハーブのまちに」という夢を膨らませていきました。

そして、平成六年十一月、川之江市の森と湖畔の公園にハーブ五十種二千七百株のハーブ園が誕生致しました。十二月には、ハーブ園オープン記念「ハーブフェスティバル」を開催し、ハーブティ



新宮インターのラベンダー植栽

が行われました。さらにまた、十一月には企業のまちづくり支援により、高速道路の伊予三島川之江インター・土居インター・新宮インターにラベンダーが植栽されました。まさに、アトリエＵＭＡの多くのメンバーの熱意が、行政や団体を動かた　のです。

また、第二回ハーブフェスティバルやハーブ講演会の開催、さらに、島根県石見町での全国ハーブサミットへの参加、川之江市健康フェアーでのハーブＰＲ活動などを行い、この二年間で、多くの人達にハーブを知って触れて頂きました。それは、私たちが当初予想していた以上の進展でした。

今後も宇摩地域が、ハーブのまちと呼べる日を夢に見て、アトリエＵＭＡの活動は続きます。

◆今後の展望

アトリエＵＭＡは、宇摩広域エリアを視点におき、広域から集まった人達の集団であるため、九十名のメンバーがいながら、まだまだ組織としての団結力は十分ではありません。

もっと多くの意見のぶつかりあいがほしいのですが、地域が異なることによる遠慮が先に立っているところが見えます。多くのメンバーが、もっと情熱的になり、もっと愉快なまちづくり集団を目指したいと考えています。

現在取り組んでいるハーブ以外のまちづくりのテーマは「土佐街道」です。メンバーで実際に土佐街道を歩いたりしてみました。今後は、どう展開していくかはまだ見えていません。もっと勉強を続けていく予定です。

さらに、今年からの新しい挑戦として、「宇摩コミュニティーＦＭ」の開局を目指した活動を展開して参りたいと思っています。こちらの方も行政との相互協力なしでは、地域への効果的な放送ができません。そういった意味においても、アトリエＵＭＡが中心になって推進していくことが必要であろうと思っています。

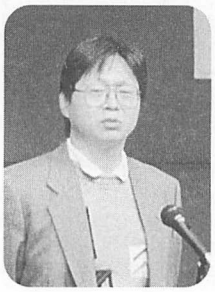
また、広報誌「アトリエ美遊」も年一回四月に発行しておりますので是非一度ご覧下さい。

第２回　ハーブフェスティバル

特集 パートナーシップのまちづくり

『パートナーシップは同じ土俵に立つことから』

長浜町町づくり委員会
会長　二宮増男



最初に、パートナーシップのまちづくりとは何か、私共長浜町町づくり委員会が行政とどのような関係を保ちながら地域活動を進めているか私見を交えながら述べてみたいと思います。

まちづくりにおいて、「ハードは行政、ソフトは住民」とか「行政と住民は車の両輪」と言われます。なんとなく分かったような気になりますが、考えてみると少し変な気もします。それは、行政と住民は別物というような印象があるからです。

行政の組織やそこで仕事をする人は、何か特殊なことをしているのでしょうか。行政に関わっている人達は、税金等から給料が支払われ、各自治体に住む人々の福祉の向上や文化の発展など、暮らしやすい環境やシステムづくりの仕事に携っています。少し違う点があるとすれば、「公共のため」という目的で、みんなから集めた多額のお金を使って仕事をしていることでしょうか。

その仕事は、まさに、そこに住んでいる人々の生活や人生を豊かにするためのものであり、これはどんな職業でも大小の差はあれ、それなくしては職業として成り立たないと思います。世の中数ある職業の中の一つと考えればいいのではないかと思います。

また、行政の中で働くという職業を選んだ人も、仕事を離れれば、親・子・夫・妻であることは同じで、自治体を構成する一住民であることはまちがいのない事実です。地域では、他の人同様に奉仕作業や各種の活動に参加しているはずです。行政と住民という関係以前に、すべての人は住民であるという意識が大切ではないでしょうか。

地域で暮らす同じ住民であれば、少しでも住みよい地域にしたいと思うことは共通のテーマではないでしょうか。ただ、その具体的な内容になると、その人の価値観やおかれている立場など、その人の人生観によって異なります。これは個人によって顔形が異なるように個性があって当然です。

今日、全国で問題になっている「いじめ」も、個性を認めず、異質なものを排除したり、敵対することで、自らが同質の仲間意識をもとうとする現れではないのでしょうか。まず始めに「個性ありき」から出発しない限り、この種の問題を乗切る方法は出てこないのではないでしょうか。町づくりも、「行政と住民の関係」も同じではないかと思います。そういう意味から「行政」という以前に、住民であることから関係を考えることが大切だと思います。

「住民」という言葉は、生活者として使われていますが、「行政」には、「住民から要求や要望があり、それに対処する」といった、仕事をこなす側面しか感じられません。行政に勤める人も、仕事として対応する「職業人」の時もあれば、住民の一人として対応する「生活者」の時もあります。

長浜町町づくり委員会は、当初行政主導で作られた組織です。始

めのうちは、様々な活動を行っていましたが、次第に停滞していったようです。そこで、二年前、再編をしようということになり、約一年をかけて現在の形になりました。今は、目的に賛同する人が、自主的に自らの手を挙げて参加している団体で、夢づくり・イベント・環境・特産品の四部に分かれ活動を展開しています。そして活動資金は全面的に行政から支援して頂いています。しかし、「お金は出すが口は出さない」といったあまり規制のない関係で進めています。

会員の中には行政の人もいますが、会では「一住民で単に行政で仕事をしている」という「生活者」として参加して頂いているつもりです。時には、その職業がら、各種の情報や便宜を図ってもらっていますが、それは、それだけ行政にいる人は、他の職業よりも住民との関わりが広く・深いということでしょう。他の人も、その職業や特技を活かしながら参加して頂いているのと同じだと思っています。

委員会主催のまちづくりフォーラム

基本的には、以上の様に考えていますが、まちづくりの現実や戦略的には、「行政」という組織がどのように動くのかという問題は、田舎であればあるほど大きな要素になっています。

一般の会社員が、いくら熱心にまちづくりに取り組もうとしても、余暇を利用した活動には限りがありますし、まして勤務時間に出来ることは、よほど仕事に活かせることは別として余りありません。一般にまちづくりの活動や、仕事やお金に結び付きにくい隙間の活動や趣味・遊びに近い活動が多いからです。しかし、これが行政の企画や振興、また社会教育、公民館といった所では、直接仕事となることがしばしばあると思います。この立場の人たちは、仕事で昼間堂々とまちづくりに関わりを持てることになります。

どんな小さな団体でも、どんなささいな成果でも、一定のものを出そうとすれば、余暇だけでは無理があります。仕事として動ける人が大切になっています。特に近頃では、まちづくりやボランティアの活動内容も、素人の遊びや思い付き程度では満足できず（満足されない）、相当の質と量が求められているようです。

そうした意味から、仕事としている人や特技を持っている人達との協力関係を抜きにしては活動しにくくなっているようです。行政に関わっている人達のまちづくりにおいての役割は、特に田舎では、益々重要になっているのではないでしょうか。

逆に、行政でそのような仕事に携わっている人達にとっても、まちづくりに関心を持っている人達はありがたい存在で、お互いに協力をすれば助かることは多いのではないでしょうか。おそらく、大きな目標や方向性ではそう違っていないでしょうから。

特に行政に携わっている人に注目する点は、行政に携わっている人は、絶大な情報量と資金と力があることで、お互いに忘れてはいけないことだと思います。

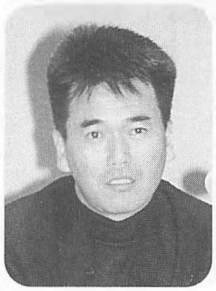
私は、行政と住民の関係を考える前に、まず、お互い住民であり「生活者」であることを前提とした良い人間関係を作ることが必要だと思います。そういう共通の部分が生まれた時、お互いの立場の違いも理解できるようになり、仕事の上での「行政」と生活者としての「住民」・また仕事としての「住民」のパートナーシップ（役割関係）が出来てくるのではないかと思っています。

ですから、今私たちの会では、「生活者」としての立場からよりよい人間関係の構築を目指して「会で出来ること」を様々なとりとめのない活動として、町民に呼びかけています。

特集 パートナーシップのまちづくり

『島に元気な風を』

七志開
会長 山本昭宏



七志開のこだわりの活動

「自分たちの町は、自分たちでよくしよう。とにかく一人ひとりやれることから行動」をモットーに、毎月一回の定例会で様々なアイデアを出し合い、検討し町への提言をするほか、ジャンボ門松の製作、新イベントの検討実施など活性化のための活動を続けている。

そもそもの発端は、昭和五十九年六月の中島シンポジウムで産業の将来的不安、後継者不足、過疎化など様々な問題が提言されたことを契機に、何とか町の活性化を考えてみようと、私が所属していた商工会青年部が中心となり、昭和六十年四月に「むらおこし実践大学」が結成された。月一回のゼミナール形式の研究会を開く一方、名前のごとく即実践をモットーに、検討した音楽イベントやトライアスロン大会の提案実施に積極的に取り組んだ。

「むらおこし実践大学」と並行して平成二年四月には、若者塾が結成され、ここでも、オンリーワンのまちづくりということでネーミングにこだわり「牛歩塾」と命名し活動した。メンバーの大半がこの二つのまちづくりグループに重複加入していたため、平成三年七月に合体して「七志開」が結成された。

「七志開（ななしかい）」って何の会・・・?。最初は名前がない「名無し会」と呼んでいましたが、七つの志で中島の未来を開こうと、中島町の呼び名である忽那七島に引っ掛けて命名された。

「楽しく参加すべ志」「自ら考えるべ志」「ホンネで話すべ志」「仲間の意見を聞くべ志」「熱意をもって取り組むべ志」「自ら実践すべ志」「ふるさと中島を愛すべ志」この七つの志と「むらおこし実践大学」から受け継がれてきた即実践の精神でもって、活性化につながりそうなイベントや企画にかかわりながら、島おこしの道を積極的に模索している。

文化財案内板の設置

パートナーとしての役場

後継者不足、過疎、何とか町を活性化したい。このことは行政も私たち「町づくりグループ」も同じ思いである。「むらおこし実践大学」「牛歩塾」「七志開」での十一年間。町の活性化につながると思えば何にでもかかわり、町に提言し、できることは即実践してきた。しかし、グループだけでの企画実践には限度があり、当然、人

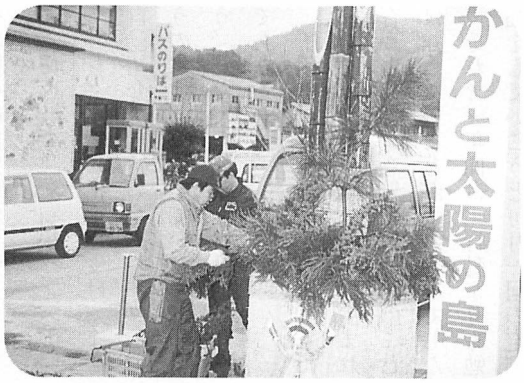
材や財源など行政の協力も必要である。行政とタイアップしながら自分たちが積極的にかかわる、代表的イベントが「トライアスロン中島大会」だった。この大会は過去に私たちが町おこしの起爆剤として提案したもので、今では四国はもちろん全国的にもトライアスロンの島として有名になっている。その他にも文化財案内板や木製ゴミ箱の製作設置や姉妹都市交流事業があり、行政と連携し合って活動を続けてきた。

このように、町の活性化のために数々の提言やイベント企画実施、製作活動などを続ける中で、まちづくりは一種のボランティアだという人がいたが、「奉仕」という感覚ではなく、自らが「できること」でまちづくりに関心を持ち、楽しみながら参加する喜び、町を活性化していく喜びの活動としてとらえれば、個々の人生における豊かさの一つになり、ずいぶん変わってくるのではと思っている。

トライアスロン中島大会

そこに住む人々がいかに自分たちの生きる地域を愛しているかが大切であり、地域住民でもある役場の人の頑張りこそが、住民参画のまちづくりへの積極参加の重要なカギとなってくる。

役場の人ともいろいろ付き合ってきたが、いろいろな人がいる。仲間となり長い間付き合いが続いている人、異動で係が変われば、縁が途絶えてしまいそれっきりの人。仲間になれるような人はどの課に変わってもいまで　もつながりを持ち、むしろ人の輪が広がっていくという気がする。少なくとも役場の人が地域を愛し、地域に根ざした行動や活動をいかに行うかということが、まちづくりの大切な要素の一つであることはまちがいないことだろう。



ジャンボ門松

行政がいくら「みんなの計画」とか住民参加型の行政を推進すると言っても、いままでのお役所的イメージがあり、それから脱皮するにはまだまだ時間がかかりそうだ。中島町においても平成六年七月に「町づくり対策課」ができ、行政も少しずつ変わりつつある。

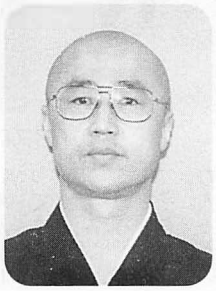
トライアスロン中島大会も、単なるイベントという目的を持たせ、昨年の第十回大会から組織を行政主体の組織から住民主体の組織へと百八十度の転換を図った。それと同時に七志開の会長である私が実行委員長に就任することになった。

行政側も前向きな活力ある職員が増え、自主性、主体性をもった住民の参画により、職員と住民がよきパートナーとしてこれから本当の中島町の活性化が始まるのではと期待している。

特集 パートナーシップのまちづくり

『間合いを計る』

地域づくり研究会「源流」
会長 小山田 憲正



今、国会内では議論をやめて、座り込みが続いています。昨年は震災に明け、オウムで暮れ今年は住専と、事件や話題には事欠きません。

「我々の血税を無駄には使わせない！」「お上の決定には逆らえない。」相反する意識が交錯する中、やがて収まりの良さそうな所を見つけて、次の話題に移っていく事でしょう。普段、役所の言い成りになっている分、一度、公務員が事件でも起こしたならば、完膚なきまでの反撃があります。今だに行政と住民の関係が権力関係に受け取られる向きがあるというのも事実のようです。

今回の特集が、パートナーシップのまちづくりということで、私たちの源流が指名されました。勿論パートナーは行政であります。源流の生い立ちが行政のお声がかりで出来上ったところが、他のまちづくりグループとは違っているのかも知れません。

一年間の町内定例学習会

平成四年に、ふるさとコンサルティング事業の指定を受け、まず自己紹介から始めたグループというのも他とは違っていたのでしょう。ただ、元気さだけは他と同様であります。

玉川町は、四ヶ村が合併して出来た町であります。町内で生まれ育った人でも意外と他地区のことは知らないことが多いようでした。

それで一年間は、行動よりも勉強をしていこうと毎月一回の定例会を決め、又その間は各地区の埋れた話を尋ねていくことにしました。一年が明け、始めて町内の人々に呼びかけて「ふるさとを考える集会」を開きました。広報や新聞で集会の様子を知り、玉川町にもまちづくりを考える会が出来たのかと、期待（？）される空気が私たちに伝わってきました。そうとなれば行動あるのみであります。一年間の勉強の成果で、町内に二十数基の看板も立てさせていただきました。材料は、学校の改築で切られた大木を、厚さ一〇センチ、横が一五〇センチ。縦が五〇センチの板に切り、文字は彫刻刀で彫り込みました。柱は農協から有線放送の電柱を分けていただきました。町内の埋もれた名所、史跡の看板は地区の歴史を示すものでもありました。ウォークラリーも、そのような所を取り入れて毎年開催しています。

源流を求めて

「源流」が出来てほどなく、四国は大変な干ばつで各地で断水が続きました。町内を流れる総社川は今治地方の生命水でありますが、自然に恵まれた玉川町は、おかげさまで断水することなく過ごすことが出来ました。そもそも会の「源流」という名前も、地域おこしの中心になるとの自負と、総社川の源ということを意識して名付けたものでありました。看板を立てる運動の一貫として源流を特定しようと、営林署の方に案内をお願いして山へ入って行きました。

しかし残念なことに源流と思わ

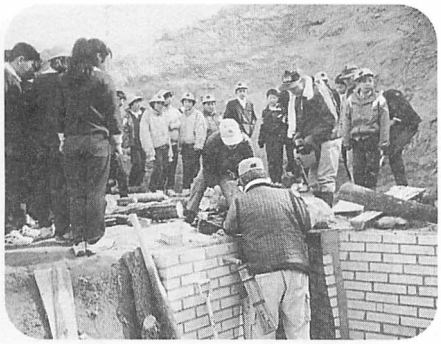
源流を求めて

しく思いました。その年の春には営林署の方、町の職員、議員や小学生、そして源流の会員とで桜や紅葉、どんぐりなどを中心に植樹祭を行うことが出来ました。

一石二鳥の竹炭づくり

玉川町は海には接していませんが、川がありダム湖があり、御聖四国霊場が二ヶ寺もあります。標高差は一二〇〇メートル、五〇キロにも及ぶ林道がつながっています。町内で、こんなにも紅葉が美しいところがあるのかと新しい発見もありました。

しかし里山といわれる所は、竹の林が蔓延し、竹が他の雑木を圧倒する勢いであります。竹林は、ざっと計算して三百町歩。これらを利用する方法はないものかと思いついたのが竹の炭であります。昭和三十年代までは町内は、炭焼きの里でありました。今では、どこの家も風呂はガスや石油であります。炭焼きの技術を絶やさないためにも、との思いで炭窯を築くことにしました。場所は総合公園の一角にと思い、町に相談した結果特別な計いで許可されました。炭となる木や竹は町内の人から無料で戴き、山が掃除できたと喜ばれています。製品となった炭や煙から取った液は、「竹取物語」や「与作」の商標を付けて、農協で売り出した処、各方面から多量の取引きの申し込みがありお断りするのに苦労したこともありました。一年間に、二十窯も炭出しが続き、会員の方にもその都度炭に塗れていただきました。地域の方や小学校の学習にも炭窯が開放され、利用されています。炭出しが忙しい中、農協の方から自前の炭窯を作って、炭を出したいとの申し出があり、会員一同もホッといたしました。


竹炭づくり

願わくば、さらに地区ごとに共同の炭焼き窯をついて、里山とのリサイクルできる空間を取り戻せたら、との思いが残ります。

おわりに

当初一三名の会員が三十名に、年齢も三〇代から八〇代、職種も実に多様にわたっています。また、町外からも参加の申し込みがあることも嬉しいことであります。

このように、周囲との良い関係が出来たことは、会がいつも開かれていたことが幸いしたのだと思います。行政の呼び掛けで出来た会ですが、決して補助に頼る気持ちを持たないよう、当初から会費制をとっております。炭の収益は、福祉や植林に回し、会計のガラス張りが、他からの支持に繋がったのだと思います。

パートナーシップとは、人や物との「間合を計る」という言葉に、集約できるように思います。

特集 パートナーシップのまちづくり

『つかず離れず』

保内まちなみ倶楽部
岡崎直司

「保内まちなみ倶楽部」が誕生して、もう五年が過ぎようとしている。四国で最初に電燈が灯り、県下で初めて銀行[注①]が設置された町、エキゾティックな香りのする保内町川之石。

まだ活動途上ではあるが、私達のやって来た事がまちづくりとするなら、「パートナーシップ」とはどんなものだったろう。少し整理を試みてみたい。

《誰がパートナーか?》

民間ボランティアの我々と、行政が真のパートナーとなる事は、理想ではあるがそう単純な事ではない。第一、組織形態に差があり過ぎる。無理に連携しようとすると我々のエネルギー消耗が激しくなる為、その愚は避ける事になる。

では、誰をパートナーとするか。それは、不特定多数の地域住民であった。だから、既製の区長→町会議員→町長（行政）へという陳情手法は殆ど取らなかった。その為に、矛先は常に住民に向けられ、マスコミには大変お世話になった。新聞やテレビ、雑誌などの原稿掲載も含めれば電波や活字に関わった件数は枚挙にいとまがない。大袈裟に言えば世論喚起、社会認知の環境づくり。「世論の関心が高まれば放っておいても行政の方は何とかなるやろ」というタカをくくった感覚とでも言おうか。（本当はこれだけではダメだが。）

《行政とのパートナーシップ》

ただ、そうした我々の活動に対して、行政も決して座して見ていただけでない事は、私もここで少し援護しておく必要がある。

工夫された鍰（からみ）煉瓦の説明板

まず、町主宰の鳴瀧[注②]塾というのがある。これは、平成元年、ふるさと創生により誕生した若者塾であるが、二年任期で現在四期目に入っている。この塾生と当倶楽部のメンバーとが、当初一部重なっていた関係もあり、振り返れば連動する事も色々多かった。ミニミニシンポジウムin迎賓館（ドレメ）を契機として、新人塾生へのレクチャーともなる町並ウォッチングや町並マップ作成への資料提供他。

従って、保内まちなみ倶楽部と鳴瀧塾とは、民間ボランティアと行政主宰という全く別の活動部隊ながら、微妙に連携し且つつかず離れずの関係にあると言える。こうした相乗効果は、そう派手ではないが、積み重ね継続すると結構大きなものがあるかも知れない。そうやって数年を経てみると、結果的には行政とも少なからずパートナーシップがとれている点も多

旧白石和太郎邸洋館（ドレメ）

に努めて来た。民家研究家や地元建築士会、あるいは大学教授などの力を借りて、江戸期の取り壊し民家や洋館（ドレメ）の実測調査などを行なったり、町並写真展等等。また、かつて銅鉱山で栄えた時期を有する保内の物的証拠としてある〝鍰（からみ）煉瓦〟の再活用運動も、当時に光を当てる事にかなり功を奏したと思える。

《問題点も……》

しかしながら、問題にもまた数多く遭遇して来た。第一には、目の前で壊されゆく歴史景観の数々。それらは全て個人所有であるが為の為すすべの無さでもあるが、宮内川の流れに雄姿を写していた芝居小屋大黒座や、ドレメに連なる洋館郡の一つ白石事務所の解体など、もういくつの建物が消えていった事だろう。当然今後も、もしかしたら明日にでも起き得る問題として我々は危惧している。そうした事に警鐘を鳴らしつつ、活動を継続させる視点が必要である。

い事に気付かされる。

直接要望を意図的に避け、住民相手にアピールする活動を続けていると、それとなくつなぐ人の存在もあり、行政との接点も自ずと生じる。何だか怪我の功名っぽいけれども。

これまでの活動内容としては、保内のアイデンティティでもある明治期を中心とした歴史景観の保全をテーマに、その魅力アピール

《これからの展望》

目下、我々を含めたそれぞれが教養を高め、地域を観る目を育てる事を主眼に、保内大学の設立を模索している。洋館を使い、定期的に講座を開いて講師を招くのである。

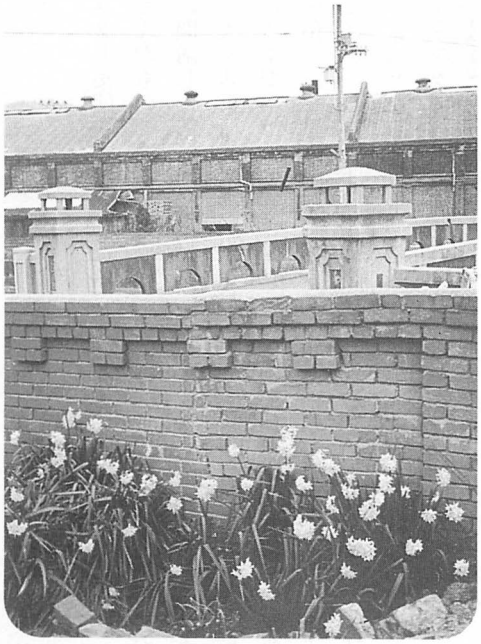
又、今後は交通体系の整備に伴い、人の流れが大きく変わる事が予測される。R378号（注①）瞽女（ごぜ）ヶ峠トンネル、あるいは大洲・八幡浜からの高規格道の直結等。現状では、保内が素通りの町になる可能性は決して低くない。ここ数年の取り組み方如何が、実は正念場となっている。それこそ「パートナーシップのまちづくり」が問われているのである。

注① 第二十九国立銀行（明治11年）。現在の伊豫銀行。

注② 保内町出身の医学者二宮敬作がシーボルトの一番弟子として長崎鳴滝塾に学んだ史実に因む名。

注③ 銅鉱石の銅を取り除いたあとの鉱滓（こうさい）を固めて作った非常に重い鋳物状の固まり。

注④ 平成十年、佐田岬半島の脊（せき）瞭（りょう）を貫き松山からの最短コースとなる。



美奈瀬橋界隈（町花水仙と赤れんが）

論談――まちづくり――

地域の時代をつくる「エディターシップ」

智頭町活性化プロジェクト集団
ディレクター
寺谷　篤

一、エディターシップとの出会い

トップダウン方式のリーダーシップを取っていて、必ずリーダーはこんな気持ちに陥る。「一生懸命やっているのにみんなが分かってくれない」「リーダーは孤独だ」「会員が何でやる気にならないのだろう」・・・etc。

実は私もこんな思いに駆られたものである。中学・高校とバスケットボールをやっていたので、東京オリンピックのバレーボールで優勝した東洋の魔女の監督だった大松博文氏の指導が、リーダーシップの理想のあり方として脳裏に焼きついていた。当時の流行り言葉は「根性」であった。球に食らいついて行け、リーダーは孤独だ。自己犠牲が鏡のように描かれていたのである。当然私のリーダーシップもそのようなものだった。

このようなリーダーシップ論を持って社会活動を行ったものであるから、CCPT（智頭町活性化プロジェクト集団）を設立した頃、悶え苦しんだものである。平成三年九月に開講した第三回杉下村塾で、京都大学防災研究所の岡田憲夫先生に水平型ネットワーキングの講義を頂いた。思い起こしてみると「これからの時代は縦の組織から横の組織となる。水平型のネットワーキングで、双方向で互いに相手を認め合いながら紡ぐ（エディター「編集する」）ことが大切である」と提案があった。この講義を受けて即実践に入った。

二、エディターシップの概念

みなさんの頭の中に思い浮かべてほしい。愛媛は〝みかん〟どころ、みかんを輪切りにした姿がエディターシップである。みかんとは、とんでもない思いつきを言っているようであるが、みかんを輪切りにしたイメージで、「核」を中心に放射線状に水平化した組織概念である。「核」と放射先の「各」との相互の関係は、上下の関係ではなく、特殊性・特質など「各」の持つ重みによって相互に引合いバランスし合うダイナミックな関係である。言ってみれば「核」によって紡がれ、共に在る緊張関係、共に生かし合うことのできる関係であるといえる。「核」と「各」は、時に「各」と「核」の関係として役割を交換することもある。水平型のネットワーキングを行い「核」のエディター機能を発揮するには、それぞれ「各」の特質なりを十二分に把握しておかなければ機能しない。放射状に張り巡らされたネットが相互に機能した場合、民主性を持ったヒューマンネットワークが達成される。

つまり、みかんは、二〇　の袋が集まって一つのみかんをつくっているのである。

三、エディターシップで「出会い館」建設

昨年の十二月十六日、十年来の念願であった「地域と科学の出会

い館」が完成した。ＣＣＰＴの拠点である。エディターシップの実践事例として建設のプロセスを紹介したい。

地域と科学の出会い館

この施設は、ＣＣＰＴのメンバーの一人五十万円の出資による一千万円と自治宝くじの還元金一千五百万円を合わせた二千五百万円の資金で建築したが、実際のところ三千五百万円は見積もれる。と言うのは、企画段階では多くの時間を費やし、設計・施工・基礎工事・電気・水道・左官工事の全てに渡りメンバーが誠心誠意建築に当たったからである。

完成式には、県内外から多数の科学者・関係者が参加し、その一部始終を検証頂いた。反省会の席上、ＣＣＰＴのメンバーが「素晴らしい建物をありがとうございました」とお互いにお礼を言う姿を見て、「本当にそうだ、お互いの持味を出し合い互いに感謝し合っている。私は一体何の役割をしたのか」と、自分が造ったことのように思っていた気持ちを静かに反省することができた。これだけの仕事をしながらお互い謙虚になる。互いの持味の成果を認めることができることの素晴らしさを感じ、今日まで取り組んできてよかったと実感した。

人はそれぞれに秘められた可能性を持っている。もちろん自分自身に自覚もなく、他人も知らない未知の可能性を幾つになろうとも秘めているのである。この前提を持ってお互いの特質を紡ぐことによって、到底自分一人では不可能なことが達成できるのである。実は、エディターシップって人間妙味のマジックなのである。

四、パートナーシップの根源

エディターシップでリーダーシップを取ることによって、自らの心を救うことができたと思う。トップダウンのリーダーシップの視点は、絶えず上位からの視点である。相手と同じ目線で物事に取り組むことによって、相手の思いが手に取るように理解できる。しかし、同じ目線に在るということは大変な努力がいる。この思考方法が身についてくると、自分というもう一つの心を絶えず見つめる心が育ち、対自化することができる。そのことによって思い上がった自分や、卑屈になる自分をセルフコントロール（平常心）できるのである。

後日、岡田先生にエディターシップの概念をこのように伝えた。「エディターシップは、まるで母親の子宮の中にある胎児ですね。引っ張っているのでなく、支えているのでなく、吊っているのではなく、子宮の宇宙空間で絶対的に浮遊している。この姿がエディターシップの精神（心）だと思います。」と。私は、エディターシップはパートナーシップの根源だと考える。

ボスとリーダーの比較

ボスは駆り立て、リーダーは導く。
ボスは権威に依存し、リーダーは協力を頼みとする。
ボスは「私」と言い、リーダーは「私たち」と言う。
ボスは恐れを引き出し、リーダーは確信を育む。
ボスはどうするかしっているが、リーダーはどうするかを示す。
ボスは恨みをつくりだし、リーダーは情熱を生み出す。
ボスは責め、リーダーは誤りを正す。
ボスは仕事を短調なものにし、リーダーは仕事を興味深くする。
ボスは利己的で、リーダーは利他的である。
ボスは肩書・地位を重んじ、リーダーは人々の心を大切にする。
ボスは孤独であるが、リーダーは人々の輪の中にいる。
ボスは封建的で、リーダーは民主的である。

キラリ光るまち

『じょんのびの里 高柳町』

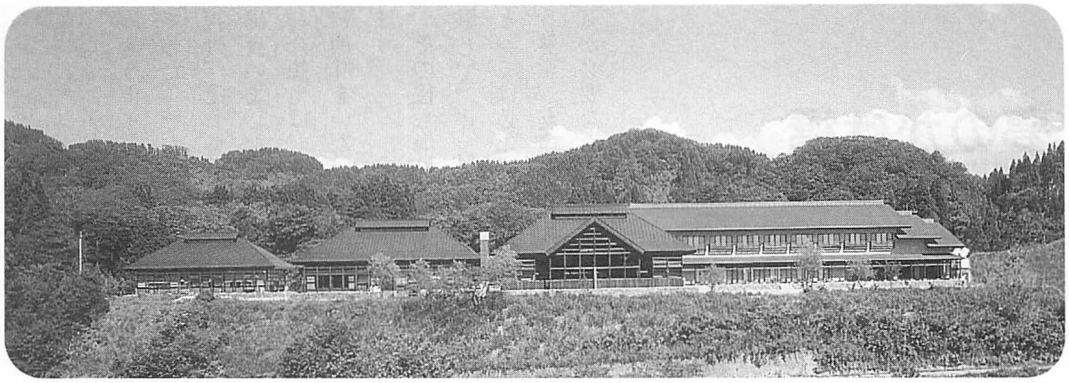
新潟県高柳町
㈱じょんのび村協会
企画営業部長
今野 冨士子

人口二、七七五人の町、高柳町は新潟県の南西部、刈羽郡の最南端に位置し、ほぼ中央部を鯖石川が南北に貫流しています。その河川沿いの起伏の激しい山間にある僅かな平坦地に、一九の集落が点在しています。私が、この町に最初に来たのは五年前、じょんのび村の施設の建設の仕事が、きっかけでした。宮城県の田舎町に生まれ育ち、都会に憧れ仙台や東京に暮らした後の出会いでした。当時、仙台に住んでいた私は、朝一番の新幹線に乗り込み大宮で新幹線を乗り換え、高柳に着いたのが昼過ぎ、打ち合わせを行い、夕方前には、帰りの新幹線に乗っていました。忙しいのが偉いかのように、仕事以外の物など目には止まりませんでした。それが、三年前に仕事の関係で常駐することになり、私自身に変化が出てきました。刺激の強い都会に慣れてしまっていた私の目や耳は、それまでの体験と、今、目の前にしている現象とを比較するようになりました。瞬間的に、思考が止まり、何が起きているのかを考えるようになりました。以前の体験から培った常識よりも、高柳で暮らして得た常識を選択するのに、さほど時間はかかりませんでした。仕事が終わりに近づいた頃には、この町に住むことを決めていました。あれから二年が過ぎようとしている今でも、この町のどこに惹かれたのかを、日々言葉に置き換える作業をしています。

高柳町の人々は、昭和六三年から、町内の若手中堅層五〇名からなる「高柳町ふるさと開発協議会」を設立し、二年間かけ延べ二〇〇回に及ぶ調査、検討会を重ねた結論として、自分たちの住むこの町が財産なんだということに気づきました。農山村の豪雪地帯と呼ばれる自然環境の厳しい中で育まれてきた生活文化、そして四季の彩りを見事に色濃く表す、自然景観を活かしたまちづくりとして、「住んでよし訪れてよし」の基本方針が決まりました。

町では、この方針に基づき、農山村の魅力を発揮しながら、交流を目的とした都市との共生型の活気溢れる農山村をめざし、「じょんのび村づくり」に取り組

かやぶき民家群

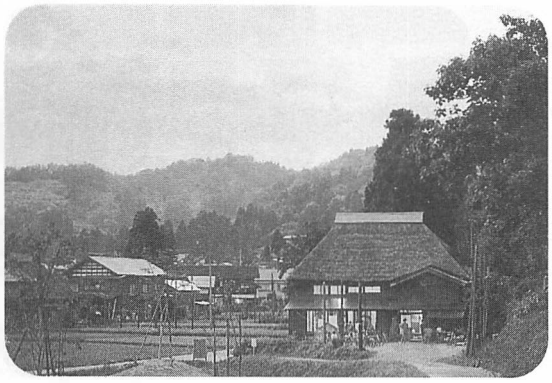


じょんのび村

みました。「じょんのび」とは、「ゆったりのびり」といった意味を持つ、この地方で使われる言葉です。「まちづくりの主役は自分」「自らの手で」という思いの強い住民は、すでに立ち上がり始めているサテライトの施設等を町民出資による組合運営で行っています。地域活性化を目的としたコア施設である「じょんのび村」（温泉旅館、食堂、加工・販売所、貸別荘、市場、畑、宿泊滞在型児童館、キャンプ場、こども遊園、河川公園からなる）も、町、個人、企業も含めた町内株合計が、九四パーセントの会社じょんのび村協会と町が、互いに責任を持ちながら協力して運営管理しています。

現在も、町全体の活性化のための話し合いが、各集落で行われています。人口二、七七五人で何が悪いのだろうかと時々思います。この町、一人ひとりの顔が見え、人間の存在の重さのある町です。「自分一人いなくても」ではなく、「自分一人いなければ」と一人ひとりが背負うものがあります。町民が、町を動かしているといった確かな手応えを、私も、感じることができるようになりました。

平成七年度「じょんのび村」には、約一四万人の観光客が訪れました。アウトドアブームと大型の車に乗って、この町に来る人を見る時、ゆったりのんびり時の流れる田舎との向き合い方に早く気づいて欲しいと切に思います。交流観光に地域活性化を委ねたこの町には、住んでいる人のいるかやぶきの家が多く残っています。かやぶきの家は、住んだことなどなくても、どこか懐かしく、安らぎ感を与えてくれます。この町の人が、財産だと気づいたものが、「多くの町が、高度経済成長と引き換えに捨ててしまったものが残っていること」であって欲しいと思います。あたりまえだと思っている暮しの中にある財産に気づくのは難しいものです。にわかには築くことのできない仲間や生活文化を大切に、手放すことなく次世代に引き継ぎながらのまちづくりであって欲しいと願っています。私にできることは、「私の住み着いた高柳町は、立ち止まって深呼吸したくなるやさしい町です。」と、この町の人々に伝えることだと思っています。



門出かやぶきの里「おやけ」

夢のかけ橋

内海村
加幡　秀樹

初めて海外に出たのは、もう十年前、韓国への青年派遣でした。その時、良き仲間、広い視野、そして、ちっぽけな自分と出会いました。

今想えば、その時から国際交流に興味をいだいていたのだと思います。

その後も海外で色々なことを体験して、片言な英語でも自分にとっては必死で、活かしたいという熱意、友達になりたいという勇気が必要なんだと自覚し、その気持ちで接することで、相手を理解し良い関係になるのだなと思いました。その自分が味わって良かった気持ちを、「少しでも多くの人に知ってもらいたい。」という気持ち一心で今、地元の「内海若者夢倶楽部」という会で活動しています。

偶然、ある会で知り合った在県のインドネシアの青年と自然と仲良くなり、その時から一緒に活動するようになりました。現在四年目になりますが、その間、お互いの故郷を紹介し合おうという思いつきから、内海の祭りに参加して、みこしをかいてもらったり、地場産業の真珠貝養殖を見学、体験してもらいました。もちろん自分達も、インドネシアに行きホームステイ、民族衣装を着て結婚式にも出席し、めったにできない経験をしてきました。

DE・あい七夕祭りで交流

しかし、序々に自己満足にとどまらず、皆に知ってもらいたいという意識から、夏のDEあい七夕祭りと、冬のパールイルミネーションinDEあいに毎年参加してもらうようになりました。その中でインドネシアの民舞や子供の時の遊び等を紹介してもらい、お互いが楽しんで心に残るもの（お金では買えないもの）をたくさん作り上げているような気がします。

そのため、必ず企画は、インドネシアの人中心に話し合い、意見を出し合っています。これまで他にお互いの郷土料理の紹介やスポーツ交流が、提案で生まれてきました。

参加した子供たちは、初めは恥かしさが出て、また、慣れてないせいもあって、うまく行きませんでしたが、今では、多少抵抗はあっても、自らの意志で参加してくれています。その経験は、きっと将来役に立つことがあると信じています。

一番いいのは外に出て体験し、比較し、考え方を変えさせられるのが一番いいのですが、それより何より、今一番大事なことは、「ふれあうこと」それがすべてにわたって必要になってくると思います。

そして、これからも内海をはじめすべての人が、国際化の社会の中で分け隔てなく、自然と仲良くなってつきあえる日が来るまで、自分ができる範囲で皆と一緒に行動していきたいと思います。

「言葉って難しい」

丹原町
渡部　財子

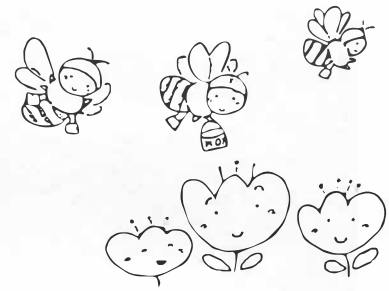
言葉って難しいですね。

私の担当する住民課の窓口には、毎日、たくさんの人が来ます。そしていつも、「言葉って難しい」と思うのです。

住民票や、印鑑証明書を「お待たせしました」と言って手渡すとき、風邪をひいている人には「早く治るといいですね」とか、お年寄りの方には、「気をつけてお帰り下さい」とか声をかけたくなるのです。しかし、そんなことを言うのもおかしな気がするし、かといって、他に言葉もみつからず、結局、何も言えなくなってしまいます。

住民にとって役場は、一番身近であるはずなのに、残念ながら、そうではないようです。私自身、ついつい事務的な対応になりがちだと反省しています。もちろん、来庁された方全員に、満足していただけるのが一番いいのですが、それにはなかなか容易なことではありません。せめて、役場をけむたい所だと、思わないでほしい……。

そこで私は、挨拶の大切さを改めて感じました。挨拶なら、初対面の人にもできますし、「おはようございます」とか、「おめでとうございます」とかいう当り前の言葉が、相手との距離を縮めてくれ、話しやすい状態にしてくれます。「先生のおっしゃった通りだなぁ」と、新人研修で受けた、挨拶についての講義を思い出します。



あの時の私は、挨拶は、礼儀として大切なものだとは知っていましたがコミュニケーションに、これほど大きな役割を果たすとは知りませんでした。

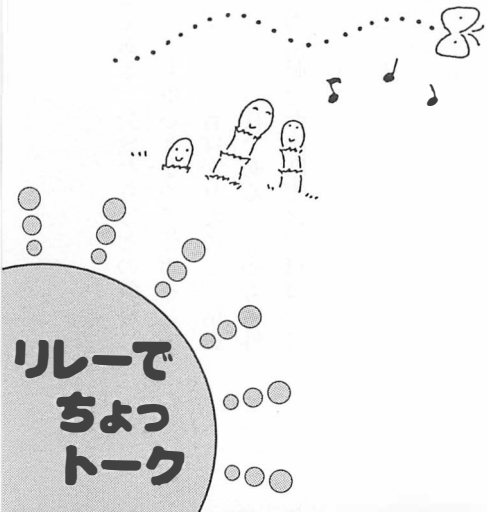
短い時間で、相手の気持ちを察し、自分の気持ちを伝えるということは、本当に難しいことだと思います。そのためには、まず話しやすい状態をつくることが大切だと思います。少しでも多く話してもらえれば、それだけこちらの理解も深まります。相手の思いを理解できれば、スムーズに対応できると思います。

それから、今後の私の課題は、もう一つあります。「お待たせしました」の後に続く言葉です。「ありがとう」と言ってもらえると、とてもうれしいのですが、私にはそれに応える言葉が出てきません。

――どういたしまして。違う、ありがとうございました。違う、さようなら。これも違う。――

結局、何も言えず、頭を下げる自分を情けなく思います。しかし、そのとき、温かい言葉をかけることができたら、少しは役場を身近に感じてもらえるのでは？と思います。

やっぱり、言葉って難しい……。しかし、私の好きな町、丹原で、私の言葉をみつけたいと思います。

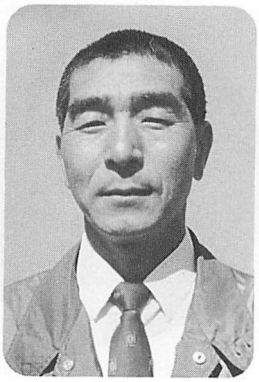


リレーでちょっトーク

地域を生きる

『木林森（ひふみ）夢クラブ活動』

大洲市木林森夢クラブ会長　平谷和生



国道五六号を大洲市新谷で分かれ、肱川の支流矢落川沿いの県道を約二十分程走ると、私たちの柳沢地区です。県の天然記念物に指定を受けている、ゲンジボタルの発生地であり、シーズンともなると、無数のホタルが飛び交う、美しい山合の地区です。

そこで、平成元年に「柳沢げんじぼたる保存会」が結成された。自然豊かな地区であるが、悩みは過疎である。約三十年前には、三千人近い住民がいたが、今は、ほぼ三分の一に減っている。保存会員の中から、活性化を目指し気心の知れた七名が、寝て見る夢より起きて見る夢の方が、とても素敵だという言葉を思い出し「夢を形に」と、私たちのクラブ「木林森（ひふみ）夢クラブ」を平成五年一月十五日に発足した。

クラブの名称も山間地らしく、一、二、三を、木に例え、一本ではただの〝木〟だが、二本で〝林〟三本になれば大きな〝森〟になるように、また、地域おこしの「礎」となる決意で命名した。

クラブの活動の目　標は、大きい、小さいは別として、年に一つは地域に形として、何かを残して行くことだ。今では、賛同者も増え、メンバーも十二人をり　年令も平均四三歳、職業も建設業や大工、農業会社　員に公務員と、さまざまである。会員たちはどの職場においても中心となって仕事をしている年代の者ばかりなので、活動はもっぱら夜である。しかも屋外での活動だが出席率は、ほぼ一〇〇パーセントである。

ジャンボ門松と横断幕

まず最初に手掛けた事は、平成五年のホタルの「養殖水路」の建設である。地域では、毎年六月にほたるまつりを催しているが、肝心なホタルが、農薬などによって減ってきている為に、まつり会場近くの休耕田を利用して、長さ七五メートル、幅一メートルの水路を、毎晩のように発電機で照明をとり建設をした。ふ化させたホタルの幼虫や、えさになる川ニナを養殖水路や矢落川に放すなどして、ホタルの復活に力を入れた。その結果今では夜空の星のごとく飛びかう地域となった。

さらに、毎年十二月中旬には、年末年始の帰省客を温かく出迎えようと、地区の玄関口となる県道沿いの橋のたもとに、直径二十センチ程のモウソウ竹をつかって、高さ四・五メートルの「ジャンボ

門松」を一対、仕事帰りの時間を利用して作っている。門松の上には、表に、「ようこそふるさと柳沢へ」裏には「いってこいや気をつけての」と書いた横断幕を設置する。地域が明るくなったと好評で記念写真を撮る帰省客もいる。また、大晦日と、正月二日間はライトアップも行っている。

発足以来毎月定例会を行ない、人間にとってもっとも大事な潤滑油（酒）を汲み交していく中から、地域の向上と未来につながる夢と楽しさが生まれる場となっている。各自が、自分の夢を熱く語り合うので深夜に及ぶことが多い。

大洲市の清流であるとともに、多くの自然が残っている柳沢へ、訪れる人たちのために、地域をよく知っていただこうと「イラストマップ」を手造りで設置し足元には花壇を置き、四季折々の花を咲かせている。

前記のとおり、私たちの地区は過疎なので、結婚するカップルの名前を書き入れた「祝福横断幕」を掲げたり、大洲の冬の風物詩として知られている、「霧」を活性化に生かそうと、雲海の見える里として「雲海まつり」を行なっている。訪れた方たちに、甘酒や搾り立ての牛乳、紅白のもちまきなどのサービスや、夢を書いた風船を参加者全員で一斉に飛ばす〝夢を大空に〟などである。しかし、自然あいてのイベントは難しい。だが最良の日は、藤縄地区からの眺めは絶景である。大洲平野がすっぽりと覆われた景観を、一人でも多くの人にPRするために、雲海の写真入りの名刺を会員はもとより、地元の有志の方達にも呼びかけて作成した。また、夜景もすばらしい場所なので、将来は展望台の設置も考えてみたいと思う。

雲海祭りで夢を書いたフーセンを飛ばす

地域づくりは、一点の「光」からと思い「地域づくり講演会」を公民館に働きかけ協力をいただき、昨年は大分県大山町の緒方英雄先生を、また傘は、熊本県小国町の山田大蔵先生を迎えて行なってきました。

さらに、開発のために自然が変って行く姿を見て、将来のために速急に「地域のビジョン」を作成する運動や、公民館活動の一環としての、夜間歩きながら道路のゴミや、空カン拾いをする「美化運動」に努める傍ら、西暦二〇〇一年に向かって、二〇〇一本の桜を植樹して「桜の里作り」を目指している。また、少しでもクラブで苗を作って行こうと、さし木や接ぎ木も行なっている。そして地域のイベントなどにも積極的に参加し協力をしている。いろんな活動を行ってきた事によって、地域全体の意識が高まり、小さな一点の「光」と、さわやかな「風」が吹き始めた事は大変喜ばしいことである。

今後においては、ホタルの養殖水路を利用し、清流にしか住まず、美しい声で鳴く「かじか」カエルの養殖や、柳沢の「柳」にこだわって矢落川沿に、すだれ柳の植樹も行なう予定である。

クラブの夢いっぱいの企画を、現実のものにして、楽しみながら地道に続けて行くことが大事であると思う。地域に生まれ、育ち、地形や風土、また、長所も短所も知り尽くした熟年パワーで、自分たちで出来る事を実行する、これが「木林森夢クラブ」だ。

過疎の進む地域だが、美しい自然や小鳥のさえずり、伝統文化が残り愛着ある地域を、次世代に最良の形として、渡してやりたいと思う。

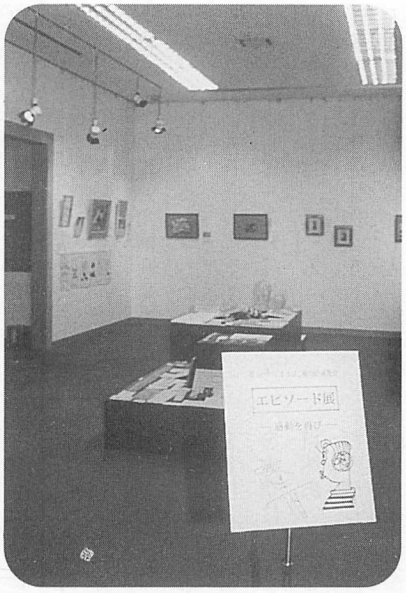
夢は、始まったばかりだが地域のために、一本の〝木〟が、大きな〝森〟になることを願って、夢を一つひとつと、着実にかなえて行きたいと思う毎日である。

ー研究員レポートー

優しさに包まれたまち“しろかわ”

〈第１回全国「かまぼこの板の絵」展覧会エピソード展から〉

前研究員　酒井康次



来館者を迎える富永氏の直筆看板

昨年南予の小さな美術館が全国的に話題になった城川町の「第一回全国かまぼこの板の絵展覧会」。奇抜なアイデアと、かまぼこ板という手軽さから、世界各地の人々がさまざまな話題を提供し、マスコミ等にも取り上げられた。そして今回、それらの逸話を集めたエピソード展が開催された。

そこで今回かまぼこ板の絵の魅力、苦労話・感動の秘話など、かまぼこの板の絵が作り出した、それに関わってきた人のストーリーから、田舎の美術館の成功劇の裏側を探ってみた。

五枚のために五十枚も

城川町役場から山沿いに歩いて三分、日本庭園調の庭にあり一際華やかな佇まいをみせる「ギャラリー城川」。そこで今回のかまぼこ板の絵展の企画責任者浅野係長にお話を伺った。

なぜかまぼこ板に？これがこの企画を聞いた人の殆どの感想だろう。きっかけは洋画家折笠勝之さんのかまぼこ板に描いた油絵がきっかけとなった。ギャラリー城川を訪ねてた折、内に子どもの絵展示室があることに感動。「美術館に子どもの部屋がある優しいところだから、ぜひ絵は何にでも描ける事を知ってもらいたい」と絵五枚を持参した。実はこの五枚の絵はこのために描いた五十枚の中から選んだもの。その話に浅野さんが感動し、今回の企画が動き始めた。

人のつながりに感謝

しかし、このための予算はない。ましてかまぼこ板の絵などというものは、町にも簡単に受け入れられるものではなかった。しかし、県や国の予算を取るために安易に本筋を外すことは拒んだ。そんな折、ある交流がきっかけで高知県のデザイン会社が「出世払いで」ということでこの話を受けてくれた。浅野さんは、このときほど人のつながりの大切さを感じた事はなかったという。かくしてかまぼこの板の絵展覧会は開催され、応募総数一万二千展あまりの大成功を収め、県内外に知られることとなった。また、昨年末の愛媛新聞社賞、など多くの話題を振りまいたのは記憶に新しいところだ。

多くの優しさにかこまれて

展覧会開催中の折、送られてくる作品の中にまじって応援の手紙などが送られてきた。「私は絵心がないから」と川柳をしたためたもの「何かのお役にたてて」と多くのかまぼこ板を送ってきたもの。阪神大震災の被災者が、「かまぼこ板になら描ける」と被害の街の様子を描いたもの。大阪から身体障害者の方が自分の絵を見に一人で訪れたこともあった。これら全国からの便りの広がりから、かまぼこ板の絵に心を寄せた人や応援の数は応募者の百倍にもなっただろうという。その中でも、新聞で紹介された白血病で亡くなった女

性の遺作も思わぬ出来事であった。

こんな事から「みなさんからもらった想いが大きすぎて、それをどうしてお返ししようかと考えました。」との想いが浅野さんを初めスタッフの心に芽生え「多くの人の思いを、何かできることはないか」という想いがエピソード展の開催へと展開していった。

絵が動かす人と人の心

エピソード展は、入り口に審査員の一人漫画家の富永一郎さん直筆の看板が来場者を案内。中央に話題を生んだ作品やそれに関する資料、また壁には新聞記事や川柳・俳句、励ましの手紙など、様々な逸話が張り出されている。中でも大きく目を引くのは、生徒一人一人が似顔絵を描き、組み合わせて魚や木、ミカンにしたもの。「板に魚を乗せたら何になります？かまぼこですよ。子ども達のこんな発想がいいんです」「下手だからダメ？違うそれは個性です」なるほど絵のテクニックは必ずしもうまくないけれども何かを感じさせる。

絵の素晴しさを語る浅野さん

白血病でなくなった女性の両親は感動を共有していただけるのならと、生前に描いたイラストや詩も提供した。また、〝役に立てて〟と送られてきた板は、明浜町の彫刻家宇都宮重良さんの手により「木瓶家族」として四本の木瓶として生まれ変わった。入賞した震災の被災者は「何も楽しいことがなかったが、楽しいことに巡り会った」お礼を綴った手紙も添えてある。

町民の見る目も変わってきた「ちょっといたづけみせてやんなはいや」「色々なかまぼこ板があるナー」などと老人らが訪れる。今までの展示ではなかった事だそうだ。「手近なものの優しさがそうさせるのは　…」と、浅野さんは予測している。

人が文化を運び ネットワークを広げる

多くの人の優しさを集め、思い出と感動を与えながら第1回目は終了した。奇抜な企画だけに、周囲の反対や苦労はあったと思う。しかし「人の心を伝えることの大切さを知り、優しさがあれば苦労も苦でなくなる」とサラリと流された。展覧会後は、たった四人の職員で一万二千通ものお礼状を手書きし、事務量だけでも相当なものだっただろう。その折に「元気の基株式会社を設立します。資本金は夢です」とつけ加えたら嬉しいことに〝社員にして下さい〟と返事が来たそうだ。「そんな人たちのとネットワークを結び、その人たちが夢大使となって文化を広げていって欲しい。こんな田舎でも文化はちゃんと根付いるのです」と語る。

今年二月から第二回絵展覧会も募集中。「二度目は怖い」というが、スタッフはエピソード展で手応えをつかんだよう。

今年はどんな作品に、優しさに会えるのか今から楽しみである。

かまぼこ板とは思えない出来ばえの作品ばかり

― 研究員レポート ―

えひめ地域づくり研究会議

『'95年度フォーラム・レポート』

前研究員　藤田　良

はじめに

愛媛県内を中心としたまちづくり人約三百名が集まり、地域の枠組を越えた全県的な活動を繰り広げている「えひめ地域づくり研究会議」の総会を兼ねた「95年度フォーラム」が、去る一月二十七日、愛媛文教会館において開催された。

今回のフォーラムには、東雲短期大学の学生約百人が参加し、フォーラムに花を添えて下さった。そして、同大学の森正康先生のご厚意により、彼女たちの詳細なフォーラムレポートを拝見することができたが、その内容は、若い女性の柔軟な発想により、多くの示唆を私達に与えてくれる、新鮮なものであった。

そこで、以下、彼女たちのレポートを通して、フォーラムを振り返ってみることとしたい。

第1部　小鍋談義

★「新えひめ地域づくり活動支援事業」活動報告集会

「アトリエUMA」は、男性的イメージが強い宇摩地域全体のイメージを変えて、子どもからお年寄りまで、そして、女性も楽しめるまちづくりをと、〝宇摩地方をハーブの里に〟を合言葉に取り組んでいた。ラベンダー一万本の栽培や、ハーブフェスティバルで参加者にラベンダーをプレゼントした報告などから、一歩一歩着実にハーブによる魅力あるまちづくりがおこなわれていることが窺えた。

また、長浜町の「フレッシュ21豊茂」は、みかん、キウイ、しいたけを栽培するとともに、二十一万本のあじさいを県道沿い、緑地帯等へ植栽、また、文化あふれる歴史をパソコン通信を使って情報発信するなどの取り組みをしている。美しい環境が最大の財産なのだと訴えていた報告者の言葉は共感を呼ぶ。

次に、スライドで詳しく〝活性炭〟の利用価値をアピールしていた「久万中学校化学クラブ」からの報告で心に残ったのは、木材利用の可能性だ。炭の浄化作用を利用した、地域をあげての水質調査の実施は、メダカが住みやすい環境の実現とともに、地域と人間に偉大さを与える。

最後に「二神島文化グループ」からは、〝島に残っている文化を伝えていくことは、島に生きる者の使命と責任である〟という言葉が印象的であり、「島」を「地域」と置き換えても納得できる名言だと思う。

★「えひめ炭焼きフォーラム」からの報告

炭の水質浄化作用や土壌改良のための利用等、炭の様々な用途を知って驚かされた。昔から人間と炭は、関わってかなければならない関係にあるのではないかと考えさせられた。それにしても、愛媛がこんなに炭焼きに対して熱心に取り組んでいることを、今回このフォーラムに参加して初めて知った。

第2部　中鍋談義

個性ある事例研究

伯方塩業の丸本執正さん、玉川町「源流」の小山田憲正さん、八幡浜市の川亀酒造の二宮久さんを中心に、運営委員篠崎克己さんのコーディネイトで討論が進められた。私の興味を引いたのは、みなさんが、各々の地域における資源をうまく活用して、それぞれの地域に密着した事業を行っているということである。もちろん営利目的もあるのだけれど、決して利益のみを追求しているのではなく、その地域を一番に考え、なおかつイメージアップを図っている。

丸本さんは、戦後の混乱の中、塩は専売という国が決めたルールに立ち向かい、会社を設立した。

なにごとも最初に事を起こすということは、とても難しい事であり、問題は山積みであったと思う、まして、そのことが正しいことなのか、その逆か、成功するのか失敗に終わるのか、それらを見極めて実行に移すことは、なかなか難しいことだと思う。まちづくりにおいても、時代の流れに身を任せるのではなく、例えば、高齢化などといった諸問題にあえて真正面から取り組み、地域の特色・風土などをいかすことができれば、素晴らしいことだと思う。

森・水・花などの地域資源を生かすことができるのは、私たち人間しかいない。何をするにおいてもまず人　間が考え、行動に移さなければ、何も作り出すことができないのだということを、三人の話を聞いていて実感した。

まちづくりは、そこに住んでいる人たち一人ひとりの意識改革から始まるのではないだろうか。その意識改革を行っていく人は、必ずしも他人とは限らないのであるから、私たちも、自分たちのことばかりを考えるのではなくて、そろそろ周囲に目を、耳を、傾けてみる必要があると思う。とにかく、多くの大人たちによって、私たちの現在の生活があるのだと考えさせられた。

井上氏・寺谷氏・若松氏による鼎談

第3部　大鍋談義　鼎談
「地域資源を生かしたまちづくり戦略」

鳥取県智頭町の智頭町活性化プロジェクト集団事務局長寺谷篤さんは、まちづくりを「自らの一歩である」と考えており、地域資源とは「人」であり、お互いの価値を認め合うことであると言っていた。寺谷さんによると、「一人ひとりの考え方は違うので、それぞれがそれを引き出す考え方をすべきであり、そうして初めて地域ができる」のだそうだ。

次に、代表運営委員の若松進一さんは、双海町の地域資源は「人」「人の五感」「きれいな夕日」であるとしている。若松さんによると、地域は今まで人々が都会に憧れるような教育をしてきたのではないかということであった。また、若い女性が都会に憧れる理由は、単にそのせいだけでなく、都会に〝男女差別が少ない〟〝選択の機会が多い〟〝プライバシーが守れる〟などの魅力があるからで、これからの地域においては、変えるべきものは変え、変えてはいけないものは守っていくという選択が大切だということだ。確かに、その町に古くから定着していることでも、よくないことはどんどん改善していくべきだと思う。そうでないと若い人たちは地域に残りにくくなるのではないだろうか。

最後に、瀬戸町長井上善一さんによると、地域資源とは「人的資源」であり、二十一世紀に向かってのテーマは「価値ある地域差の創造」だそうだ。瀬戸町は学校が小さいので、一人が選ばれるのではなく、みんなで何かを共有できるメリットがあるそうで、このことからも、人と人との関わりが大切であるということが分かると思う。

終りに

フォーラム全体として、私たちにも理解しやすい話題が多かったので、会に参加してとても良かった。〝まちづくり〟は何といっても「人と人との関わり合い」が大切だと思う。そして、その次に、地域の伝統や個性をいかに出せるかということが続いていくのではないだろうか。

これからの愛媛、松山はもっともっと独自の地域を目指し、リトル東京にならないように、地域づくりを進めていくべきだと思う。

風おこしのちかい

『今こそ、ふるさと孝行を』

えひめ地域づくり研究会議
運営委員　塩崎満雄

「お父さん！お父さん！おばあちゃんが…」声にならない女房の悲痛な叫びに、夜警明けの寝不足の中、何事かと母の部屋に駆け込むと、女房が必死に、身体をゆすり名前を呼んでいる。

俯せになっている母が、帰らぬ人となるとは、夢にも思わなかった昨夜の夕食と団欒。

午後一一時三〇分の夜回りの時には、テレビがついていたのにと思うと、冷たくなっている母の手を握っても信じることはできませんでした。

元気が取り柄だった母親が、別れの言葉も告げずに八二歳の人生を働き詰めで遠い旅立ちに…と思うと、抱き起こす母の身体の重さが「死にたくない」と、言っているようで、力がはまらず、震えが止まらなくなっている自分に気づきました。

マウスツーマウスをしながら、必死に生きて来た母の姿が、走馬灯のように脳裏を駆け巡ると「親孝行できなかったなあ～」と後悔したのが、一二年前の寒い朝でした。

お悔やみに訪れる隣近所のばあちゃん達のように、「昨日一緒に病院に行って、野良仕事も…」と言って、惜しんでくれる人。

「満よい、おふくろさんはお前のこと心配していたでよ」と手を合わす人。

虚脱感の中、思うことはおふくろはまだまだ死なないと自分に言い聞かせ、これから親孝行しようと霊前に誓っても、現実には親孝行できないことに、はがゆさが募るばかりでした。

そんな空虚な時が流れるころ、「まちづくり」「人づくり」と、世間を騒がす同世代の人達に出会い、青年団時代の熱き思いを今一度と思って一念発起したのが「阿弥陀会」や「クジラを泳がす会」の発足であったのです。

他の人達は「町」「村」を対象にしていたのを、自分は隣近所の人々を、すなわち「集落」を対象として考えたのです。

生前の母が「お前の父さんは、集落のために尽くし、事故で亡くなったがよ、人のためになれ」と事あるごとに言っていたのを守るためにも、「集落づくり」にこだわろうと思いました。

当時は、物珍しさも手伝って、関わるメンバーも若くて元気一杯で、活気に満ちていましたが、一〇年も続けるとマンネリと老いとが大きな障害になっていることも事実です。

魚のつかみどり大会（阿弥陀会）

こんな傾向は、愛媛県下と言わず日本の至る所で、苦悩している現実ではないでしょうか。

すなわち斜陽化に

ある「まちづくり」、トーンダウンしている「地域づくり」であると言っても過言ではないのです。

二一世紀を迎える大事な時期に、こんなことでは「ふるさと孝行」が出来ない。

「ふるさと孝行したくてもふるさとはなし」とならないためにも、今が大切な時、踏ん張りどころです。

情熱は年齢に関係なく湧きいずるもの、頑張りはひとりでも貫けるもの、こんな思いを信念に持ち、続けることの楽しさ、すなわち「継続は力なり」を確証すべき時です。

意を同じくする人達よ、今がピンチです。しかし、これを乗り切れば必ずチャンスがやって来ます。

ピンチが大きければ大きいほどチャンスは膨らみ、その喜びや楽しさは一人であることは間違いありません。

花畑づくり（阿弥陀会）

私の所属している「阿弥陀会」の花壇にも、五年ぶりに集落六五世帯の玄関に一輪の花（チューリップやグラジオラス）が配れるようになりました。

普段は冷たい視線を寄せていた一部の人達も、今は花の苗をくれるようになりました。

続ける事によって、正に花開いた訳です。

「町や村」を現状でよいと思う人は少ないと思います。

なら、変えたいと思っている人は、まず自分、自らを変えてみることが肝要かと思います。

イチローも言っています。「変わらなきゃ、変わらない」

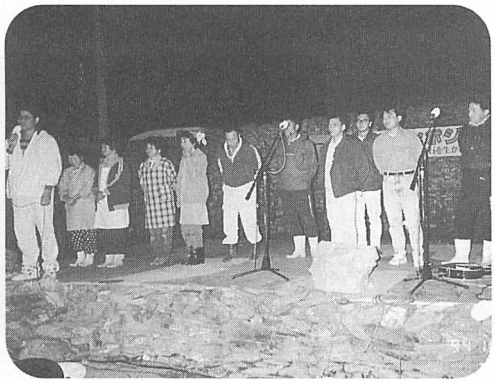
町を変えることに没頭するのでなく、人を変えることに視点をおくことが必要です。

ある町で、福祉計画を立てるとき、担当者全員で、車椅子に乗って町を散策したそうです。

その結果、普段見えなかった部分が見え、数箇所にわたって不便なところに気付き、それを計画書の中に取り入れ、事業実施にあたったそうです。

視点を変えることの大切さの一例ですが、我々の活動にも大いに考えさせられる話だと実感しました。

ふるさとを恋しいと思う時代は終わりにして、ふるさとを愛する時代に執着すべきです。



青い石のシンポジュウム（さきがけ橘塾）

なぜなら、「恋」は下に心がある、すなわち下心のふれあい。

それに比べて「愛」は真ん中に心があり、真剣です。

ふるさとを愛し、ふるさと孝行をすれば、町がいきいきとして活気づくこと請け合いです。

ふるさと孝行は、ピンチを迎えチャンスを活かすこと、そのためには、元気であること・継続の力を信じること・情熱をもつこと、そうして誰にも負けない「愛すること」を知ることです。

と、格好のいいことをいっても、最終的には、よりよきパートナーが必要です。

指導者として凄いと呼ばれる人達には、必ず、良妻と呼ばれる相方がいます。

その最たる実例が若松夫人であることは誰もが疑わない事実です。

余談になりますがその次に塩崎夫人がくるかも？

親孝行できない人、親孝行している人も、ふるさと孝行に頑張ってみよう！

アイテムえひめオープン

愛媛FAZ構想のシンボル施設である愛媛国際貿易センター「アイテムえひめ」が、松山市大可賀にオープンしました。

アイテムえひめは、中四国最大の大展示場を持つ複合コンベンション施設で、大規模な展示会や各種イベントが開催できます。この他にも、質の高い様々なイベントに対応できる小展示場や、同時通訳設備を備えた会議室などがあります。

また、イベントが開催されていないときでも、県内特産品の販売や、観光・産業を紹介する愛媛県物産観光センター、貿易や投資、個人輸入などに関する業務を行うジェトロ愛媛貿易情報センター及びFAZ支援センター、生活雑貨や食料品などの輸入品を販売するアイテムワールドマートなど、愛媛と世界を身近に感じられる施設が待っています。さらに、ロビーには、現代アートを代表する日比野克彦氏の製作したオブジェが展示され、独特の空間を演出しています。

今、愛媛県で一番ホットな「アイテムえひめ」に、ぜひお越しください！

営業時間　午前九時～午後六時
（イベント開催中は異なる場合があります。）

休館日　十二月二十九日～一月三日まで

問合せ先　アイテムえひめ
☎089-953-0130

今治市立図書館オープン

三月二日新たにオープンした今治市立図書館は、

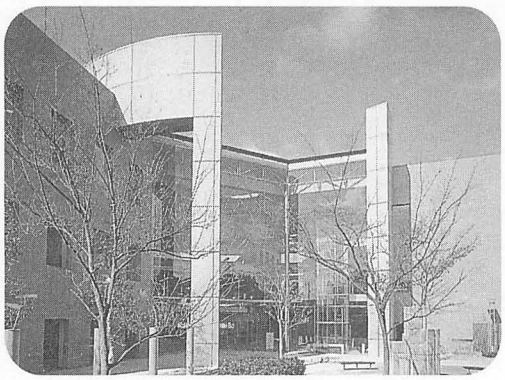
(1) 図書館を単なる教育施設としてとらえずに、市民が日常生活の中で気軽に立ち寄れる『くつろぎ』の場として、提供する。

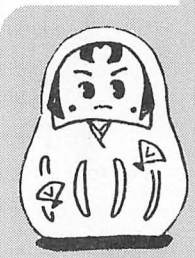
(2) 公園に隣接する立地条件を利用して、公園と図書館を空間的に一体化させる。

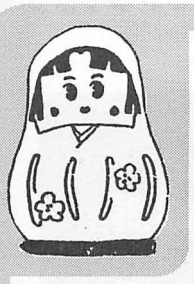
(3) 施設中心部に円形吹抜を設け、二つの公園（平成十年駅西区画整理完成時に整備予定）をインナーストリートでつなぎ、将来双方が自由に往来できるものとして設計・建築されたものです。

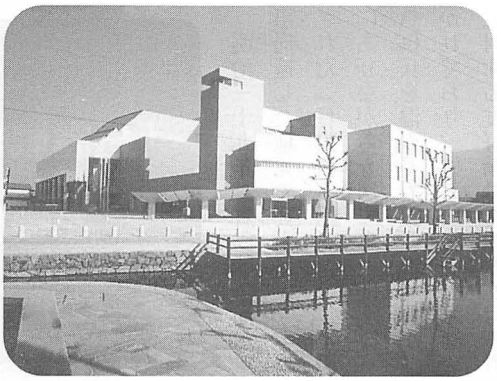
待望の施設オープン後、多くの市民のみならず周辺町村からも来館者が多くあります。そして、今後、市民の生涯学習の場として真価を発揮するには、好評のAV資料（VD、CDなど）を含む資料の充実とそれを支える職員体制の充実が一層大切になっていると考えています。是非一度ご来館下さい。

◆**問合せ先**
今治市立図書館
☎0898-32-0695









芸術文化の拠点 西条市総合文化会館オープン

市民待望の西条市総合文化会館がオープンしました。この文化会館は、市民の芸術文化の拠点であり、生涯学習の情報発信の場であり、更には、二十一世紀を担う青少年の育成の場として、様々な形での利用が出来ます。

ご来場をお待ちしています。

〈主な施設〉

・大ホール（一、一二五人収容）
・小ホール（三二八人収容）
・リハーサル室、練習室
・特別会議室等

〈会館時間〉

午前九時～午後十時

〈休館日〉

・毎週月曜日
・祝日の翌日
・年末年始
（十二月二十九日～一月三日）

〈問い合わせ先〉

西条市総合文化会館
☎〇八九七－五三－五五〇〇

星空の下で結婚式

天体観測館は、久万高原の美しい星空を楽しんでいただくための施設として、平成四年三月にオープンしました。昼はプラネタリウムで人工の星を、夜は天文台の六十センチ望遠鏡で、本物の星をご覧いただくことができます。

この度当館は、結婚式場としても利用していただけることになりました。会場は「プラネタリウム」または、城郭風展示ホール「星天城」で、お客様のご希望によって選んでいただくことができます。プラネタリウムの場合、式の後でお二人の生まれた日の夜空を再現して、簡単な星空案内を行うといった演出も可能です。料金は、いずれも一万五千円で、午前中のみのご利用となります。また、同じ敷地内にある「ふるさと旅行村」で、披露宴会場のお世話もさせていただくこともできます。

高原の豊かな緑に包まれて、あるいは、満天の星空を仰ぎながらの挙式はいかがでしょうか。他人とちょっぴり違ったことをしてみたいアナタも大歓迎です。

※問合せ先

久万高原天体観測館
☎〇八九二－四一－〇一一〇
ふるさと旅行村
☎〇八九二－四一－〇七一一

「日露戦争絵馬」を後世へ残す

明治三十九年、日露戦争から無事帰還した地元の兵士により奉納された「日露戦争絵馬」は、戦場にありながらも適味方の区別なく負傷兵を温かく看護する場面が描かれており、先人たちの国際社会に対する友好精神を語りかける貴重な歴史的文化財です。

平成三年、当時のソ連大阪総領事が伊豫岡八幡神社を訪問され、日ソ親善記念のカラマツを植樹。平成四年には、ロシアの少年野球チームとの交流も行われました。

また、平成六年、愛媛県歴史文化博物館にレプリカが展示され、広く県民の知ることとなりました。

平成二年十月には、伊予市文化財の指定を受け、今後は、この絵馬の恒久的保存を図るとともに、歴史文化の継承と国際交流の促進に努めたいと思います。

未来の子どもたちの為、地域に対する誇りと愛情を持って、文化財を活かした町おこしを共に楽しんでみようではありませんか。

※問合せ先

伊豫岡八幡神社

☎〇八九―九八三―二八二〇

（日・露戦争で、日本兵がロシア兵をやさしく看護している絵馬）

総合的な福祉施設 游の里「ユートピア宇和」四月オープン

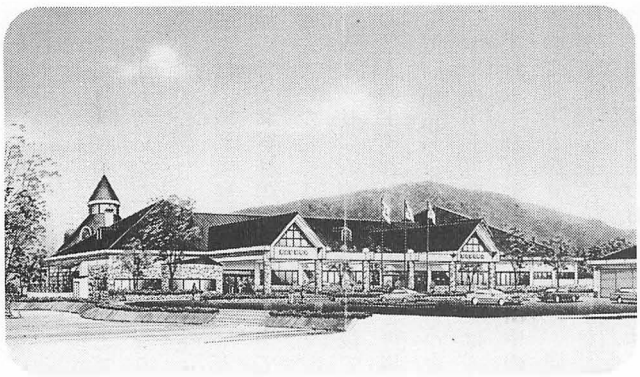
游の里は、野村ダム湖を望む美しい景観を生かし、宇和のワラぐろをイメージした建物で、鉱泉活用の健康づくりや体験農業などのレクリエーションが楽しめる施設です。メインの温泉施設「ユートピア宇和」には、展望浴場やサウナ、健康器具コーナー、そしてゆったりとくつろげる日本間・ロビー・軽食コーナー等が完備されています。

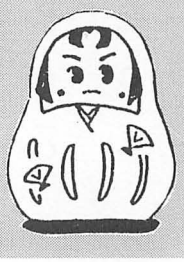
また、屋外はダム湖が一望でき、大駐車場、ちびっこ広場、ゲートボール場、ふれあい農園、農産物直販所、キャンプ場、遊歩道などが整備され、児童・高齢者をはじめ町民のふれあいの場、世代間交流の場としての機能を持っています。友達やご家族で、のんびりとした時間を過ごし、心身をリフレッシュしてみてはいかがでしょうか。

※問合せ先

宇和町役場福祉課

☎〇八九四―六二―一一一一





平成８年度事業計画

㈶愛媛県まちづくり総合センター

㈶愛媛県まちづくり総合センターは、県内各地で進められている地域づくり活動の支援機関として、潤いと活力に満ちた新しい愛媛のくにづくりと21世紀の愛媛を創造していく基盤づくりのため、交流、連携によるパートナーシップのまちづくり等に視点をあて、県内の各地域が進めている地域づくり活動を支援することとし、平成８年度の事業計画を次のとおり定めました。

平成８年度事業計画の概要

○　情報誌『舞たうん』の編集・発行

まちづくり活動の情報発信と地域づくり活動者のネットワーキング誌として、継続して発行する。

なお、誌面構成、内容の検討を行い、一層の内容充実に努める。

○　新鮮かつタイムリーな情報の収集・提供

県内各地からのまちづくり情報の個別需要に対し、新鮮かつタイムリーな情報を提供する。

○　『全国まちづくり情報』のデータベースによる情報提供

「全国まちづくり情報」を活用し、各地の地域づくり実践者や関係機関団体等からの照会に応じて、必要な情報を提供する等、情報提供活動の充実を図る。

○　情報収集用刊行物の整備

まちづくり関連の各種刊行物と、「まちづくりビデオ」の整備を進め、引き続きまちづくり情報の蓄積を図る。

○　イベント情報誌『えひめイベントＢＯＸ』の編集・発行

平成８年度中に県内で開催される、あらゆるジャンルのイベントを保存活用タイプの情報誌にまとめ発行する。【４月発行】

○　『地域づくり研究サロン』の開催

まちづくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について、深く検討を重ねていくため、専門家をアドバイザーとしたサロンを開催する。

○　『えひめ地域づくり研究会議フォーラム』の開催

えひめ地域づくり研究会議と共同して、フォーラムを開催し、地域づくりに関心を持つ人々の学習、研究活動を積極的に支援する。

○　『地域づくり交流促進事業』の実施

県外の地域づくりグループ等活動者を県内に招き、県内の地域づくりグループと交流させることにより、まちづくり活動者の人材育成とネットワーク化を図る。【１０月実施】

○　調査研究活動の実施

地域づくりに関するテーマを設定し、調査研究を行うことにより、活動のあり方や展開の方向を考察するとともに、研究員の資質向上に資する。

○　地域づくり人材育成関係事業への協力

行政の行う地域づくり人材育成関係事業に積極的に参加・協力し、人材育成とネットワーク化を促進する。

㈶愛媛県まちづくり総合センター

人　事　消　息

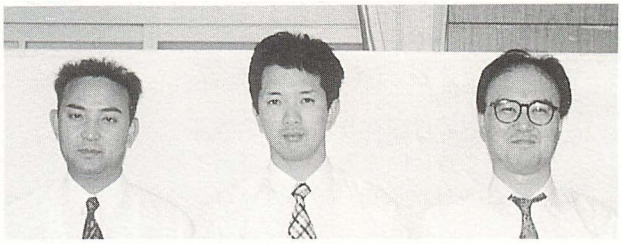
■平成８年度　センター職員（☆印は新しいスタッフです）

（前列左から）☆研　究　員　井上　正男（共済農協連）　☆所　　長　渡部　正人　☆研　究　員　稲田　紹（伊方町）

（後列左から）　主任研究員　中村　博之　　研　究　員　大谷　基文

●４月１日付けで、所長・研究員として勤務された４名の活動の拠点が変わりました。これからもよろしくお願いいたします。

渡邊　智（退　職）



竹松　毅（愛媛県信連）　酒井　康次（野 村 町）　藤田　良（宇和島市）

すっかり春の日差しになり、いい季節になってきました。

外へ飛び出して手足を伸ばし、さわやかな風に吹かれ、心も体もリフレッシュしたいですね。

春を見つけに海へ、山へと出かけてみませんか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係
〒７９０　松山市三番町八丁目二三四番地
愛媛県生活保健ビル三階
㈶愛媛県まちづくり総合センター
ＴＥＬ　０８９（９３２）７７５０
ＦＡＸ　０８９（９３２）７７６０

発行／平成八年四月十五日
㈶愛媛県まちづくり総合センター
㈶愛媛県市町村振興協会